

宮崎汎会員が見た世界の旅第3部歴史編第15話

キリル文字を創った静かすぎる国 ブルガリア

ここは遠きブルガリアドナウの彼方・・・なんの脈絡も無く唐突に口を突いて出た鼻歌は、ロシア民謡“バルカンの星の下に”の一節である。2010年の旅はバルカン・ドナウ・ドラキュラという他愛のない連想から「ブルガリアとルーマニアを巡る12日間ツアー」に参加することからはじまった。ブルガリアの首都ソフィアは四方を山に取り囲まれている盆地である。



ヴィトシャ山から見たソフィア

ブルガリアと隣国ルーマニアは2007年にEC加盟を果たし、社会主義時代の面影を引きずりつつも少しずつ変化を遂げている。ブルガリアを旅して不思議に感じたことは、旅行中に見聞きした都市や農村の市民生活のどの局面をとって見てもおよそ“喧騒”という場面に出くわすことがまっくたくなかったのである。静かすぎる国なのである。中国やベトナムをはじめとする、アジアの旺盛な活力を見慣れた

目には、まったく別世界の趣を持った国と映った。

かつて共産圏の一員だった頃のブルガリアは、物不足で食料品さえ不足しがちであったのに、いまや輸入品であろうか南国のバナナやパイナップルなども市場に並んでいる。また品質やデザインを問わねば生活物資も豊富にある。日本と比較すると家電製品などは旧式で、薄型テレビはソフィアのデパートでもごくわずか並んでいるだけであり、一般家庭への普及は推して知るべしであろう。1993年初めて訪れた時のソフィアは、街の中心に共産党本部の建物がでんと聳え、すぐ近くには人民共和国時代の初代首相ゲオルギー・デミトロフ廟があった。社会主義国ではレーニン、毛沢東、ホーチミンいずれも遺体に化学処理を施して巨大な廟に安置し衆人の参拝を受けているが、ゲオルギー・デミトロフも同様であった。それからわずか17年の間に民主化が進み廟は取り壊されてしまい公園となっていた。

市内の中心部にはキリスト教の寺院とイスラム教のモスクが共存している。この国は1390年から500年間もオスマントルコの支配が続いたのである。オスマントルコは必ずしもイスラム教でなくともよしとする政策をとった。

19世紀末にオスマンの圧政から解放してくれたのは、ロシア皇帝のアレクサンドル2世である。ロシアはオスマントルコとの戦いに20万人に及ぶ相当な犠牲を払った。ブルガリアはソフィア市内に犠牲となったロシア兵を慰霊するためアレキサンドル・ネフスキー寺院を建てた。またロシア皇帝の騎馬像を市内の中心に据えるなどしてロシアへの感謝の気持ちを表した。

ブルガリアはトラキア時代・マケドニアの支配・ローマ帝国時代・オスマントルコ支配などの変遷をたどってきたので、その遺構がソフィアの市内にも残っている。ブルガリアの最高級ホテルであるシェラトンホテルの中庭にあるローマ時代の聖ゲオルギ教会（4世紀）や旧共産党本部の地下には2世紀以降のローマの古代都市セルディカの要塞の城壁跡が地下鉄工事の際に見つかっている。



アレキサンドル・ネフスキー寺院



ロシア皇帝の像



ホテル中庭の聖ゲオルギ教会

ところでブルガリア観光の目玉は、ソフィアから120 kmにある世界遺産の「リラの僧院」である。それは深い山懐のどん詰まりに突然現れ、その出会いはまことに感動的である。リラの僧院全体は要塞さながらに4階建ての建屋が周囲を取り囲んでいる。修道僧が暮らす個室を含め、以前は僧院全体を自由に見学できたのに、17年経った今では建屋全体が立ち入り禁止となり、宝物館も有料となり撮影料まで要求するようになってしまった。人々の素朴でひたむきな信仰に支えられたリラの僧院にも歳月を経て、商業化・拝金主義の波が押し寄せ少なからずショックを受けた。リラの僧院では修道僧ラファエロが刻んだ十字架は必見だ。12年の歳月をかけて50 cmの木製の十字架に聖書の物語が刻まれ、そこに刻んだ人物は1500人に及んでいる。拡大鏡を通し見るが、まるで細密画を見ている様だ。小さな十字架にこれだけのものを刻んだ根気と信仰の深さに自然に頭が下がろうというものだ



リラの僧院



フレスコ画に埋め尽くされた回廊

世界の良質なバラの香料の70%はブルガリア産といわれている。ブルガリア特産のバラの香りはカザンラクを中心とする“バラの谷”として知られた地方で産出される。だがバラの谷といってもバラで野山が埋め尽くされているわけではない。土産にバラのジャムを買った甘くいい香りがした。

さてブルガリアは日本人には馴染みのない判読困難なキリル文字を作った国である。看板も道路標識もすべてキリル文字表記である。文字が読めないことは悩ましい。国境を越え隣国ルーマニアに入るとローマ字表記でほととしたものだ。



キリル文字の国ブルガリア 看板も道路標識も何が書いてあるのか判読できない

キリル文字はロシアの文字と思っていたが、実はここブルガリアで発祥した文字である。862年キリスト教伝道のため東ローマ皇帝が遣わしたキリルとメフォディの兄弟が発明したグラゴル文字がのちのキリル文字である。



古都ヴェリコ・タルノヴォ旧市街

余談だが現在のブルガリアの有名人と言えば大相撲の花形力士であった琴欧州だろうか彼は魅力的な古都ヴェリコ・タルノヴォの出身である。

日本人になじみ深いブルガリアのイメージはヨーグルトであろう、CMソングが口をついで出る。ヨーグルトは同国を訪れると飲み物やスープでしばしば味わえる。

ところで今回の旅は大いなるハプニングに見舞われた。

最終日ツアーコンダクターから重要な話があると招集がかかった。アイスランドで大規模な火山噴火があり、各国

の空港はどこも閉鎖し飛行機も飛んでない。自然災害なのでいつ帰国できるか判らないとのこと。一週間ブカレストの空港は閉鎖されたままで再開の目途はたらず一行に不安が高まった頃、ウィーン空港が閉鎖を解いたとの情報で急遽バスを仕立て、長駆1000kmを走りウィーンに向かった。途中ブタペストで半泊しどうやらウィーン経由で帰国できた。凶らずも思い出が一層深まった旅となった。